

果実販売動向

販売課 米澤 松太



3月は、出遅れていたイチゴの

流通量が増加しました。その要因として、東日本を中心に冷え込みが緩んだことで生育が前進したことが挙げられます。また、ひな祭りの需要や春商材の目玉としてイチゴの売り込みが活発となりました。3月中旬以降は、2番果の切り上がりと反動で3番果の出回りが少なく、不足感が強まって堅調な販売となりました。

伊予柑・デコポン等の中晩柑類については、着果不良と製品化率の悪さから流通量が少ないこと、品薄なミカンの代替としての需要から基調高で推移していました。しかし、売価の高さや食味の悪さから荷動きが鈍く、弱含みでの推移となりました。特に「デコポン」については、昨秋の長雨などの影響により酸高傾向で、割安な「不知火」の割合が多く、全体の単価

は伸び悩んでいます。

輸入果実については、国内柑橘類の品薄や食味不良を受けて、オレンジは増加傾向にありましたが、グレープフルーツ等シトラス関係はハリケーン等の気象災害による収量減に加えて、円高の影響により単価高の展開となりました。

リンゴについては、全般に小玉傾向であることから、安定した入荷と食味を背景に年明け以降、全国で小玉企画の消費宣伝を実施したことにより売り場の主力品目となり、産地在庫の少なさを反映し、概ね順調な販売となりました。しかし、3月には売価設定引上げとイチゴの増量や野菜の入荷量の回復とともに荷動きは鈍化しました。

一方、輸出については、中華圏「春節」向けの大玉系リンゴが不足し伸び悩みました。

今後、イチゴについては、気温

の上昇とともに入荷の回復が見込まれますが、中・晩柑類等については入荷が少なく、スイカについても4月下旬からの本格化から、果実全般に品薄傾向は変わらず、リンゴは引き続き主力品目として売り場が確保される見込みです。しかし、産地在庫が例年以上に少なく、好環境ではありませんが、消費地気温の上昇に伴うヤケ・褐変等の品質低下及び有袋ふじ移行時のプライスギャップによる売り場の縮小と消費の停滞に加えて、N産りんごとの競合などが懸念材料となります。

4月に入り、当JAではサンふじと有袋ふじの並行販売を実施し、円滑なリレーを実践しながら、王林、ジョナゴールド、シナノゴールドはスマートフレッシュ（MCP）処理物の販売に移行しています。品質管理の徹底を図るとともに、需給バランスを考慮した有利販売を実施します。

別 表

品 種	サンふじ	ふじ	王林	ジョナ	むつ	その他	合計
単 価(円)	2,923	4,793	2,686	3,367	4,910	2,812	2,789
前 年 比(%)	101	119	97	109	104	92	96
在庫数量(トン)	44,849	24,594	10,106	15,350	289	5,084	100,272
前 年 比(%)	71	83	90	92	95	101	79

単価は全農あおもりデータ（3/31累計）、在庫数量は県りんご果樹果作成（2月末）